

『日本大文典』の意志・推量形式と

「話しことば」「書きことば」

北 崎 勇 帆

1. はじめに

古代語で、終止法において意志・推量を表す助動詞ムは、現代語に至る過程で推量をダロウ、意志をウと言いつけるようになる。文終止以外の位置（以下、「非終止用法」）においては、古代語のムと現代語のウはどちらも連体修飾用法を持つが、ムが種々の名詞に接続可能であるのに対し、ウは「あろうことか」「あろうはずもない」のような極めて限定的な環境にしか生起することができない。

- (1) a. 親にもはらからにもにくまれば、足のむかむ方へゆかむとて、人の国へいきける。 (大和物語 [951] 20-大和 0951_00001,74400¹)
- b. 親にも兄弟にも憎まれたので、足の{むく/*むこう}方向へ行こうと、よその国へ行った。
- (2) a. それを取りて奉りたらむ人には、願はむことをかなへむ (竹取物語 [9C] 20-竹取 0900_00001,81400)
- b. それを取って献上 {する/*しよう} 人には、{願う/*願おう} ことをかなえてやろう。

また、従属節末での生起は古代語・現代語ともに限定的である。古代語においてはムは已然形を取ってド・ドモにしか接続することしかできず（小田 1990）、現代語のウもガ・カラ・ケレド・シといった限られた形式にしか接続できない（南 1964・1974・1993）。これは例えば、古代語の（サ）ス・（ラ）ルと現代語の（サ）セル・（ラ）レルが多様な従属節末（ツツ・ナガラ・ナラバなど）に生起可能であることと対照的である。

こうした観察に基づいて古代語と現代語の様相を繋げることで、ム・ウの用法について、「古代語では活発であった非終止用法が現代語に至る過程で衰退した」、「終止・非終止、いずれの位置にも生起できたムが、現代語に至る過程で終止用

¹ CHJ からの引用に際しては、サンプル ID と開始位置を示す。

(2)

法に一本化された」ものと捉えるのは妥当な考え方であるようにも思えるが、以下のような事例に鑑みれば、必ずしも非終止用法が単調減少的に衰退したわけではないようである。

- ・ムを本来上接しないトモに、中世前期以降、接続例が現れる（北崎 2019a）。
- ・成立期にはム・ウが接続しなかったナラバが、中世後期にウを前接するようになる（蜂谷 1977, 小林 1979）。
- ・同じく、ニハ・バについても中世後期以降に新しくウニハ・ウバ²の例が見られる。
- ・現代語ではウが接続可能な接続助詞ガ³は中世前期の成立と目される（石垣 1955）が、当期にはウの接続例が見られない。ウガの例が見られるのは中世後期以降である（北崎 2019b）。
- ・意志・推量形式の例数を通時的に見たとき、終止用法が中世後期以降に漸増する一方で、非終止用法のうちの従属節末の例と、形式名詞の連体修飾の例も増加する（北崎 2019b）。

本稿では以上のことを前提としつつ、転換期と目される中世後期における意志・推量形式の非終止用法の様相を、ロドリゲス『日本大文典』（1604-1608 刊、以下『大文典』）を主資料として分析する。次節ではまず、『大文典』を考察対象とする事情について述べる。

2. 資料と方法

『大文典』はイエズス会宣教師ジョアン・ロドリゲス（1561-1633）の手による、長崎刊行の日本語の文法書である。全 3 巻のうち、第 1 巻の半分を「活用」（*conjugação*）に充て、存在動詞 DEGOZARV（で御座る）、否定の存在動詞 Nai（ない）、「話しことば」の肯定動詞 Aguru（上ぐる）、Yomu（読む）、Narō（習う）とそれぞれの否定、「書きことば」の肯定動詞 Aguru（上ぐる）とその否定、欠如動詞（*verbos defectivos*、活用に不備のある動詞を指す）、形容動詞（*verbos adjetivos*）Fucai（深い）とその否定、Aquiracana, Aquiracanaru（明らかな・明らかなる）、「書きことば」の形容動詞とその否定、存在動詞 Soro（そろ）・Sōrō（候）とその否定の活用について記述する。

構成はマヌエル・アルパレスの『ラテン文典』（1594 刊）のものを基本的には踏襲するが、「話しことば」と「書きことば」という明確な文体の対立はラテン語・

² ただし、ウバは本来はウニハの縮まったものと考えられる（蜂谷 1977）。

³ 一般的な確定条件のガを指す。「～ようが～まいが」のような逆接仮定条件のガの成立は近世以降である。

ポルトガル語には存在せず、当代の日本語に特徴的であった文体差に着目したロドリゲスが新たに設けたものであった（土井 1976, 岸本 2018）。この文体差についてロドリゲスは「例言」で、「話しことばや日常の会話に於ける文体と文書や書物や書状の文体とは全く別であって、言ひ廻しなり、動詞の語尾なり、その中に用みられる助辞なりがたがひに甚だしく相違してゐる。さういふわけだから、本文典の論述に於いても、話しことばではかくかく用み、書きことばではかくかく用ゐると説いた」⁴ (p.5) と説明する。

「話しことば」と「書きことば」の記述は、本稿の対象とする意志・推量形式では次の記述が端的なものであり、「未来」の時制において、「話しことば」ではウ・ウズ・ウズルが用いられ、「書きことば」ではその領域にンもしくはベシが対応するものと述べられる。

- (3) Agucô, zu, ru (上げう, ず, る)。
 Yomô, zu, ru (読まう, ず, る)。 }
 Narauô, zu, ru (習はう, ず, る)。

これらは書きことばの次の言ひ方に相当する。

- Aguen (上げん)。Agubequi, bexi (上ぐべき, ベシ)。
 { Yoman (読まん)。Yomubequi, bexi (読むべき, ベシ)。
 Narauan (習はん)。Narôbequi, bexi (習ふべき, ベシ)。

(直説法の時・未来に就いて：51)

一方、主節末以外に生起する場合において、例えば次例 (4) のような文末形式名詞文の場合、「話しことば」ではウコトヂャ・ウモノヂャの例が挙げられるが、「書きことば」の例としてそれに対応するはずのンコトナリ・ンモノナリはなく、ベキコトナリのみが示される。

- (4) a. Cacô cotogia. (書かうことぢや。) Mairô monogia. (参らうものぢや)。
Xô cotode atta. (せう事であつた。) Deusuo tattomi vyamaitatematçuru bequi
coto nari. (デウスを尊み敬ひ奉るべき事也。)(分詞の異格構成：397)
 b. Deusuo taixetni zonji tatemaçuru bequicotonari. (デウスを大切に存じ奉るべき事也。)(直説法の時・未来のある言ひ方に就いて：54)

⁴ 『大文典』『小文典』の引用は以下の訳書による。

・土井忠生訳注 (1955) 『日本大文典』三省堂
 ・日笠博司編訳 (1993) 『日本小文典』新人物往来社

(4)

このように、『大文典』の意志・推量形式の記述において、その生起位置によっては、新形式と旧形式が均衡な対応を見せないことがあるようである。このことを踏まえ、本稿では以下の点について考えたい。

- ・『大文典』の「話しことば」と「書きことば」という文体間の対立において、意志・推量形式の記述にはどのような差異が見られるか。
- ・『大文典』の「話しことば」と「書きことば」の記述に見られる文体間の差異は、ロドリゲスが観察した「話しことば」や「書きことば」の実態をどのように反映するか。

3. 『大文典』の記述の整理

以下、『大文典』における意志・推量形式に係る記述を、主節末、従属節末、連体修飾位置の順に整理する。

3.1 主節末

主節末に関わるのは直説法の未来時制である。(3)にも見たように、「話しことば」のウ・ウズ・ウズルに、「書きことば」のベシとンが対応する。(5)に「話しことば」、(6)に「書きことば」の記述を示す。

- (5) a. Agueô (上げう)。Agueôzu (上げうず)。Agueôzuru (上げうずる)。
Agetarôzu (上げたらうず)。
(話しことば・肯定第一種活用・直説法・未来: 32)
- b. 未来の三つの形, Agueô (上げう), Agueôzu (上げうず), Agueôzuru (上げうずる) は話しことばにだけ使はれるものであるが、その外に助辞 Bei (べい) を取ったものもある。…話しことばでは稀だが、‘関東’ (Quantô) では盛んに使はれる。
(話しことば・肯定第一種活用・直説法の時・未来に就いて: 50)
- c. Yomô (読まう)。Yomôzu (読まうず)。Yomôzuru (読まうずる)。
Yomitarôzu (読みたらうず)。
(話しことば・肯定第二種活用・直説法・未来: 124)
- d. Narauô (習はう)。Narauôzu (習はうず)。Narauôzuru (習はうずる)。
Narôtarôzu (習うたらうず)。
(話しことば・肯定第三種活用・直説法・未来: 141)
- e. Fucacarô, zu, ru (深からう, ず, る)。Fucô gozarô, zu, ru (深うござらう, ず, る) (Ai, ei, ij, oi, ui に終わる動詞の肯定活用: 192)
- f. Aquiracananarô, zu, ru (明かならう, ず, る)。Aquiracani arôzu (明かにあらうず)。(Na, 又は Naru に終る形容動詞の活用: 207)

- (6) a. Agubequ, bequi, bexi (上ぐべく, べき, べし)。Aguen, zu, ru (上げん, ず, る)。Aguenan, zu, ru (上げなん, ず, る)。Aguetaran, zu, ru (上げたらん, ず, る)。Aguebaya (上げばや)。

(書きことば・肯定活用・直説法・未来: 158)

- b. 書きことばの未来に使ふ助辞も亦種々あるが, その中のあるものは理解し難い。そこでまたいくらかの例を挙げる事にする。その助辞は次の通りである。

Bequ (べく), bequi (べき), bexi (べし)。例へば, Agubequ, bequi, bexi. (上ぐべく, べき, べし)。

An (アン), En (エン), In (イン)。例へば, Aguen (上げん), Yoman (読まん), Naruan (習はん), Min (見ん), Mochiyn (用みん)。

Nan (なん)。…Baya (ばや)。…Ten (てん)。… [以下複合形など]

(書きことば・肯定活用・直説法・未来に用ゐる助辞: 165)

否定の場合, (7)「話しことば」のマイ・マジ・マジイに (8)「書きことば」のマジキとベカラズが対応し, 「書きことば」の場合にはジも使用する旨が述べられる。

- (7) a. 未来 Agurumai, l. maji (上ぐるまい, 又は, まじい)。Aguemai, l. maji (上げまい, 又は, まじ)。語根又は肯定の現在に Mai (まい), 又は, maji (まじ) を添へる。

(話しことば・否定第一種活用・直説法・未来: 108)

- b. Yomumai (読むまい)。Yomumaji (読むまじ)。

(話しことば・否定第二種活用・直説法・未来: 134)

- c. Narōmai, l. maji (習ふまい, 又は, まじ)。

(話しことば・否定第三種活用・直説法・未来: 150)

- d. Fucacarumai, l. maji (深かるまい, 又は, まじ)。Fucō arumai, l. maji (深うあるまい, 又は, まじ)。

(話しことば・形容動詞の否定活用・直説法・未来: 202)

- (8) a. Agumajiqui (上げまじき)。Agubecarazu (上ぐべからず)。Agubecarazaru (上ぐべからざる)。Aguezaran (上げざらん)。Agueji (上げじ)。

(書きことば・否定活用・直説法・未来: 177)

- b. Fucacarubecarazu (深かるべからず)。Fucacarazaran (深からざらん)。

Fucacaraji (深からじ)。Fucacarumajiqu, qui (深かるまじく, き)。

(書きことば・形容動詞の否定活用・直説法・現在: 211)

- c. この Agueji (上げじ) の形は, 他の二種の活用では, Yomaji (読まじ),

(6)

Narauaji (習はじ), Vomouaji (思はじ) 等となるが, ‘下’ (Ximo) のある地方ではこれ話しことばに使ふ。否定活用の現在の形の Nu (ぬ) を ji (じ) にかへて作るものである。例へば, Aguenu (上げぬ), agueji (上げじ)。Yomanu (読まぬ), yomaji (読まじ)。Narauanu (習はぬ), narauaji (習はじ), 等。

(書きことば・否定活用・直説法・未来: 177)

以下, 肯定では「話しことば」のウ・ウズ・ウズルに対する「書きことば」のン・ベシ (・ベキ), 否定では「話しことば」のマイ・マジ・マジイに対する「書きことば」のマジ (キ)・ベカラズ (・ジ) を基本的な対応関係と考えたうえで, 主節末以外の記述を見ていくこととする。

3.2 従属節末

従属節末の生起に関係するのは, 「接続法」(已然形+バやニ・ニハに接続する場合), 「日本語及び葡萄牙語に特有の接続法」(已然形+ドモ, ケレドモ, トモなど), 「条件的接続法」(未然形+バ, ナラバ, ニオイテハなど), 「許容法・譲歩法」(命令形放任法, マデ, トモなど) の4種の法である。このうち, 意志・推量形式の生起が関わる例を示す。

3.2.1 接続法・条件的接続法のニ・ニハ

接続法未来時制のニ・ニハに, ウとその周辺の形式が現れる。(9) に示すように, ニ・ニハの場合, 「話しことば」にはウズルニ・ニハがあるが, 「書きことば」にニ・ニハはなく, ベキニのみが挙げられる。これは, 同じ接続法の未来において形式名詞トキに前接する場合に, 「話しことば」ではウトキ, 「書きことば」ではントキ, ベキトキが挙げられ, ウとン・ベシが対応するのと対照的である。なお, 現在時制で接続法を構成する已然形+バは, 未来時制においては肯定・否定ともに「書きことば」専用であり, 「話しことば」には見られない。

(9) a. Aguetarõ (上げたらう)。Aguetarõzu (上げたらうず)。Aguetarõzuru (上げたらうずる)。Aguete arõ (上げてあらう)。Toqui (時。)} 上げてあらうから。

Agucõ zuruni, l. niua (上げうずるに, 又は, には)。Agucõ toqui (上げう時。)} 上げようから。

(話しことば・第一種肯定活用・接続法・未来: 69)

b. Aguequereba (上げければ)。Agubequinareba (上ぐべきなれば。)} 上げるべきだから。

Aguetarantoqui (上げたらん時)。Agubequitoqui (上ぐべき時)。
Agubequini (上ぐべきに。)} 上げるだらうから。

Aguetecara, yori, nochi (上げてから, より, のち。)} 上げてゐるから,
上げて後。 (書きことば・肯定活用・接続法・未来: 173)

- (10) a. Agueni saquini, l. ijennni, l. mayeni (上げぬ先に, 又は, 以前に, 又は,
前に)。Ageide (上げいで。)} 上げないうちに。

Aguemaini (上げまいに)。Agumai sacaini (上げまいさかひに。)} 上げ
ないから。 (話しことば・否定第一種活用・接続法・未来: 116)

- b. Agumajiquereba (上げまじければ)。Agumajiquini (上げまじきに。)}
(書きことば・否定活用・接続法・未来: 178)

次項 (11) に挙げる条件的接続法の未来時制においても同様に, 「Agucô niua (上
げうには), Aguetarô niua (上げたらうには) の形は条件法に属する」(条件的接続
法: 83) としてウニハが挙げられるが, やはり「書きことば」の項には, ウニハ
と対応するはずのンニハは記述されず(ただし, タランニハはある), ベクハのみ
が記述される。すなわち, この項目において, 「話しことば」のウと「書きことば」
のンは対応しないということになる。

3.2.2 条件的接続法のナラバ

条件的接続法のうちの一つにナラバがあり, その (11a) 「話しことば」の未来
時制には, ウ・ウズ・ウズルが前接するウ・ウズ・ウズルナラバが挙げられてい
る。その一方, 「書きことば」には (11b) 動詞基本形+ナラバは存するものの,
ウナラバと対応するはずのンナラバはなく, ベキナラバも記述されない。否定の
場合も同様に, 「話しことば」にマイナラバがある一方で, 「書きことば」にはマ
ジキナラバが示されない。

- (11) a. Agucô (上げう)。Agucôzu (上げうず)。Agucôzuru (上げうずる)。{Naraba
(ならば), 又, nivoiteua (に於いては)}。

Agucôniua (上げうには)。

(話しことば・肯定第一種活用・条件的接続法・未来: 81)

- b. Agurunaraba (上ぐるならば)。Ageba (上げば)。Agubequua (上ぐべく
は)。Agueni voiteua (上げんに於いては)}。

Aguetaraba (上げたらば)。Aguetaranniua (上げたらんには)。Agucete araba
(上げてあらば)。

(書きことば・肯定活用・条件的接続法・未来: 174)

(8)

3.2.3 固有の接続法のドモ・ケレドモ

「日本語及び葡萄牙語に固有な別の接続法」, すなわち, トモ・ドモを伴う場合については, 「話しことば」の肯定では已然形を持つウズルのみがドモに接続でき, 否定も同様にマジケレドモの例が見える。「書きことば」の場合もム・ンにドモが後接する形(メドモなど)はなく, ベシ・マジにのみベケレドモ・マジケレドモが挙げられる。

なお, ケレドモは「話しことば」専用で, 肯定にウケレドモ, 否定にマイケレドモが挙げられ, 「書きことば」にケレドモは見られない。ケレドモは, 中世後期にマイの已然形「マイケレ」+「ドモ」から異分析を経て分出されたものと考えられる(湯澤 1929, 西田 1978)ので, この点, 「書きことば」の体系にケレドモが記述されないことと合致する⁵。

- (12) a. Agueôzuredomo (上げうずれども)。}
Agueôqueredomo (上げうけれども)。 Aguete arôzuredomo (上げてあらうずれども)。}
Agueôtomo, l. tomama (上げうとも, 又は, とまま)。 Aguetaritomo (上げたりとも)。}
(話しことば・肯定第一種活用・固有な接続法・未来: 77)
- b. Aguequeredomo (上げけれども)。 Agubequityedomo (上ぐべきと雖も)。}
Aguetari tomo (上げたりとも)。 Agubequereba tote (上ぐべければとて)。}
(書きことば・肯定活用・固有な接続法・未来: 174)
- (13) a. Aguemajiqueredomo (上げまじけれども)} 上げないけれども。
Aguejde arôzuredomo (上げいであらうずれども)。} まだ上げてはみないだらうけれども。
Aguemai tomo, l. tomama (上げまいとも, 又は, とまま)。} 上げないとしても。
(話しことば・否定第一種活用・Domo, Tomo を伴ふ接続法・未来: 117)
- b. Aguemajiquere domo (上げまじけれども)。 Agubecarazaredomo (上ぐべからざれども)。}
(書きことば・否定活用・Domo, Tomo を伴ふ接続法・未来)
- (14) a. Fucacarumai, l. majiqueredomo (深かるまい, 又は, まじけれども)。 Fucô arumaiqueredomo (深うあるまいけれども)。 Fucacarumai tomo, l. tomama (深かるまいとも, 又は, とまま)。}

⁵ これと同様, (12-14) のウトモ・マイトモも中世後期以降の定着である(北崎 2019a)ので, 「書きことば」には記述されていない。

(話しことば・形容動詞の否定活用・固有な接続法・未来：205)

- b. Fucacaru majiquere domo (深かるまじけれども)。Fucacarazaru bequeredomo (深からざるべけれども)。

(書きことば・形容動詞の否定活用・Domo 及び Tomo を伴ふ接続法・未来：211)

3.3 連体修飾

以上の接続法における従属節末に加え、連体修飾の位置にも意志・推量形式は生起し得る。『大文典』の記述で連体修飾に関わるのは、不定法においてコトなどの形式名詞を後接する場合、動詞状名詞(動名詞)においてタメを後接する場合、目的分詞・未来分詞においてモノ・ヒトを後接する場合である。不定法の場合、肯定では「話しことば」のウ・ウズ・ウズルコトに「書きことば」のンコト・ベキコトが対応し、否定では「話しことば」のマイコトに「書きことば」のマジコトが対応する。これは主節末の場合(3.1)と同様の、均衡な対応関係である。

- (15) a. Agueô (上げう)。Agueôzu (上げうず)。Agueôzuru (上げうずる)。} Coto (こと。)} 上げること、上げるべきこと。

(話しことば・肯定第一種活用・不定法・未来：91)

- b. Agurucoto (上ぐること)。Agubequi coto (上ぐべきこと)。Aguen coto (上げんこと)。} (書きことば・肯定活用・不定法・未来：175)

- c. Agumai coto (上げまいこと)。Agurumaicoto (上ぐるまいこと)。

(話しことば・否定第一種活用・不定法・未来：120)

- d. Agu, l. Agumai coto (上ぐ、又は、上げまいこと)。Agubecarazaru coto (上ぐべからざる事)。(書きことば・否定活用・不定法・未来：179)

動名詞・分詞においては、モノ・ヒト・タメの場合に、「話しことば」にウタメ・ウモノ・ウヒトが挙がる一方、「書きことば」にンタメ・ンモノ・ンヒトはなく、ベキタメ・ベキモノのみが挙げられる。ここでもまた、「話しことば」のウと「書きことば」のンはうまく対応しない。

- (16) a. Aguru tame, l. tote (上ぐる為、又は、とて)。Agueô tame, l. tote (上げう為、又は、とて)。Agueni (上げに)。

(話しことば・肯定活用・動詞状名詞・Dum に終るもの：101)

- b. Agueô mono, fito, ua, uo (上げう者、人、は、を)。} 上げるべき者。

(話しことば・肯定活用・現在分詞・未来：106)

- c. Agurutame, l. tote (上ぐる為、又は、とて)。Agubequitame, l. tote (上ぐべき為、又は、とて)。

(10)

(書きことば・肯定活用・動詞状名詞・Dum に終るもの：176)

d. Agubequi mono (上ぐべき者。)

(書きことば・肯定活用・現在分詞・未来：176)

4. 文体間の対立と「書きことば」

ここまで、『大文典』における「話しことば」のウが、主節末以外では多くの場合において「書きことば」のンと対応せず、ときにベシとも対応しないことがあることを示した。本節では、このロドリグスの記述が当代の「話しことば」と「書きことば」の実態、ないしは意志・推量形式の歴史をどのように反映するのかわを見ていきたい。

まず、ロドリグスの観察した「書きことば」がどのようなものであったかを確認する。『大文典』の第3巻は「文書」の文体について述べる巻であるが、その冒頭では「書きことば」の「文書」の種類を内典と外典(俗書)の2種に分ける。外典は「支那」と「日本」のものに二分され、前者に四書・七書や散文・詩・聯句を、後者に文章・消息・謡・草子・物語・舞を挙げる。「物語」には「平家物語、平治物語、大平記などの歴史の文体」、「伊勢物語のような草子風のもの」、「道心者や隠遁者の伝記の文体」を挙げ、「伝記」については本文中では『撰集抄』『方丈記』などを引くので、この「書きことば」には中世前期の和漢混淆文も含まれることになる。『平家物語』が『大文典』中で明示的に「書きことば」の例として引かれる箇所を(17)に挙げ、高野本⁶の該当箇所を(18)に示す。

(17) a. 書きことばでは往々、Vmiyori funenite maitta. (海より舟にて参った。)
といふ事がある。例へば、

Quiyomoricô vmiyori funenite Cumanoye mairarequeru. (清盛公海より舟にて熊野へ参られける。)
「平家」(Feiq.) 一

(場所に関する言ひ方：407)

b. この助辞 Rō (らう) は書きことばの助辞 Ran (らん) に当る。例へば、
Agururan (上ぐるらん)、Aguetçuran (上げつらん)。又は、Aguenuran (上げぬらん)、Aguenzuran (上げんずらん)。

……

Corega caguiride, mata goranjenu cotomoya aranzurantote, von namidauo nagaxitamōzo catajiquenaqui. (これが限りで、また御覧ぜぬ事もやあらんずらんとて、御涙を流し給ふぞかたじけなき。)
「平家」(Feique) 巻

⁶ 『大文典』の引用する『平家』が高野本に近似するという風間(1967)の指摘と、『天草版平家物語』の原拠本を推定した近藤(2008)に基づく。

二

(可能法：87)

- (18) a. 其故は、古へ清盛公、いまだ安芸守たりし時、伊勢の海より、船にて熊野へ参られけるに、おほきなる鱸の、船に躍り入たりけるを、先達申けるは、… (高野本平家物語巻1・鱸 [13C] 上12-3)
- b. 「末代こそ心憂けれ。これ限りで又御覧ぜぬ事もやあらんずらん」とて、御涙を流させ給ふぞ忝き。
(高野本平家物語巻2・少将乞請 [13C] 上89-5)

ここで問題となるのは、前節で確認した『大文典』の「書きことば」の形態記述には見られない従属節末・連体修飾位置におけるンやベシの使用が、これら「書きことば」として示された『平家物語』『撰集抄』などの資料や文語体のキリシタン資料、『大文典』中の「書きことば」の引例中に一定数見出されるということである。

例えば3.1 で見たように、接続法・条件的接続法の未来時制において、「話しことば」ではウニハが挙げられつつ、「書きことば」ではそれに対応するはずのンニハは挙げられていなかった。「話しことば」に示されるウニハは「～する場合において」に近似する意味の条件節を構成し(外山1969, 迫野2012), それは当代の口頭語にも認められる。例えば天草版平家物語にも次例(19a)が見えるが、これは原拠本に近い斯道本『平家』にンニハとある例(19b)である。中世前期においてはその前身であるムニハも同様に(19c)のように条件節を構成し(来田1993), 「書きことば」の世界においても十分に一般的な形式であったと考えられる。

- (19) a. 実盛六十に余って戦の場に向かわうには <mucauō niua>, 鬢髭を墨に染めて若やがうと思う
(天草版平家物語巻3-4 [1592刊] 40-天平1592_03004,12090)
- b. 実盛六十二余テ、軍ノ場ニ向ハンニワ, 鬢鬚ヲ黒ニ染テ、若施ント思也,
(斯道本平家物語巻7 [13C] 435-9)
- c. 成経参リタリト聞給ワムニハ, イカナル火ノ中、水ノ底ニオワストモ、ナドカー一言ノ御返事ナカルベキ。(延慶本平家物語2末[13C]260-12)

そして、『大文典』で「書きことば」とされる他の資料や文語体のキリシタン資料にも同様、ンニハの例が見出される。

- (20) a. 君の御前なんどへ鞠とり出さんには、松もしは柳の枝の三にわかれたらん中の枝に、いたくひきつめて付けつゝ、木の枝を上になして、第三のかゝりのもとにあゆみよりて、右のひざを突て、手をのべてをき侍るべきなり。
(撰集抄巻8-31 [13C中] 4455)

(12)

- b. 仰モサル事ナレドモ、如レ今公家一統ノ御代トナランニハ、天下ノ武士ハ、指タル事モナキ京家ノ人々ニ付順テ、唯奴婢僕従ノ如ナルベシ。
(太平記巻14 [14C] 1-51-14)
- c. 嗚呼汝、是非にみゝとく真の道信ぜんには其徳莫太にしてわが辛勞も益有べし、
(国字本ぎやどぺかどる [1599 刊] 上3ウ12)

さらに、『大文典』そのものにも『平家』の「召さんには」の例が引かれており、これは高野本の本文 (21b) と一致する。すなわち、『大文典』はニハを含む『平家』の例を他の箇所でも引用しながらも、何らかの理由でニハを「書きことば」の体系記述に組みこんでいないのである。

- (21) a. *ligon igomo coreyori mesanniu cacuno gotoqu mairu bexi.* (自今已後もこれより召さんには此の如く参るべし。) *mesan toqui* (召さん時) の意。
「平家」(Feique) 巻二
(接続法を決定することになる或種の助辞及び言ひ方に就いて: 70)
- b. 自今以後もこれより召さんには、かくのごとく参るべし。
(高野本平家物語巻2・烽火之沙汰 [13C] 上102-8)

次に、形式名詞を後接する場合について、ここでは特に接続形式的に用いられるタメを見ておく。目的を表すタメ (ニ) は中世前期まではムガ・ングを承けるのが一般的であるが、中世後期にはム・ンを承けることが一般的になり、その後、ウを承けるウタメ、助動詞を承接しない無標+タメへと移行していく (吉田 2011)。『大文典』の「話しことば」の記述 (16a) はこの歴史に一致する。

- (22) a. *Xindemo nauo aguen tameni qemiö bacariuo nanorözu.* (死んでも名を揚げん為_ニに仮名ばかりを名乗らうず) Tos. (土佐正尊)
(邦訳日葡辞書 [1603 刊] Nanori, u, otta・吉田 2011 : 96)
- b. その宿の亭主と隣よりキリシタンと見知られまい為_ニに、それを供致いで、度々ゼンチヨの御堂へ入って、ゼンチヨ並に十念もなしました。
(コリヤード懺悔録 [1632 刊] 20-21)

(16) で見た通り、「書きことば」の分詞の項の記述にはベキタメのみが挙げられ、ンタメは組み込まれない。しかしながら、上のニハの事例と同様、『平家』や『太平記』にはンタメの例が見られ、文語キリシタン資料にも多くの例を見出させるほか、『大文典』中の「語」の引例にもンタメを含むものがある。

- (23) a. 閻王問てのたまはく、「余僧みな帰りさんぬ。御房来事いかん」。「後生の在所承はらん為_ニ也」。「たゞし往生・不往生は人の信・不信にあり」と

云云。 (高野本平家物語巻6・慈心坊 [13C] 上352-9)

- b. 「上人噉問ノ事、此曉既其沙汰ヲ致候ハン為ニ、上人ノ御方へ參テ候へバ、燭ヲ挑テ觀法定坐セラレテ候。其御影後ノ障子ニ移テ、不動明王ノ貌ニ見サセ給候ツル間、驚キ存テ、先事ノ子細ヲ申入ン為ニ、參テ候也。」 トゾ申ケル。 (太平記巻2 [14C] 1-65-5)
- c. Varerauo toga yori nogaxi tamauan tameni, cano Cruzni cacari taqu vboximexi tamayeba nari. (長崎本どちりなきりしたん [1600刊] 19-3)
- d. …mata von monogatariuomo vquetamauaran tameni chigotachimo coreye von ide nite soro. (…又御物語をも承らん為に稚児達もこれへおん出でにてそろ。) 同前。「関寺小町謡」(Xequidera gomachi vtai)
(大文典・助辞の構成：542)

ナラバについてもこれに似た状況が看取される。条件的接続法におけるナラバは「話しことば」ではウ・ウズ・ウズル、マイに接続するものと記述されている。ナラバの前接語が拡張し、ウやマイに接続するようになるのは中世後期のことであり(小林1979)、『大文典』の「話しことば」の記述はこれを反映している。

- (24) a. これはいづくへ行くぞ? 迎も失われうならば (vxinauareô naraba), 同じゅうは都近いここともでも有れかすと、言われたは、せめての事で御座った。(天草版平家物語巻1-7 [1592刊] 40-天平1592_01007,4480)
- b. 参るまいか? 参るまいならば (mairumai naraba), その様を言え、清盛も図る様が有ると、言われたれば…
(天草版平家物語巻2-1 [1592刊] 40-天平1592_02001,25740)

一方の「書きことば」にはンナラバやベキナラバはなく、動詞基本形+ナラバのみが挙げられていたが、延慶本『平家』や、『大文典』で「書きことば」の資料とされる『太平記』においては、ベシにナラバが接続するベキナラバの例が見られ、『大文典』の「舞」の引例にもベキナラバを含むものがある。

- (25) a. 「…三井寺ニテ御権頂アルベキナラバ, 延暦寺ヲ大衆発向シテ、園城寺ヲ焼払ベシ」ト僉議スト聞ヘケレバ,
(延慶本平家物語第2本 [13C] 上217-16)
- b. 又桃井ヲ引者ハ、敵御方勝負ヲ決スベキナラバ, 争カ敵ヲ欺ザルベキ。
(太平記巻29 [14C] 3-114-8)
- c. Cacu arubequi naraba, naguinata motte cōzuru monou. (かくあるべきならば、薙刀持って来うずるものを。) …「昌尊の舞」(Xōzonno Mai)
(大文典1巻・希求法：68)

以上、『大文典』の「話しことば」と「書きことば」の記述は、特に従属節末・連体修飾位置の場合において不均衡な対立を見せるが、それは必ずしもロドリゲスが観察した「書きことば」の資料の実態を反映しないようである。『大文典』の「例言」には「この書では主として話しことば及び普通の会話に参考となる事を取扱った」(p.5)とあるので、「書きことば」については単に主要な形式のみを記述しただけのことであるものと見ることもできるが、記述から漏れた形式の使用頻度が格別低かったというわけでもなく、『大文典』中に例として引かれる場合すらあることも併せれば、ロドリゲスは Nニハ などの形式が「書きことば」で使用されていることを認識しつつも、体系記述からは積極的に除いたと考えざるを得ない。

古代語における ム 系助動詞は従属節内における生起が限定的で、已然形を取って ドモ に接続することしかできない(小田 1990)。この後、 ム は N ・ ウ に転じることで活用形を喪失し、いわゆる「不変化助動詞」(金田一 1953)化することとなって、 ドモ への接続や已然形の結びは ウズル が担うようになる⁷。こうした状況下において、 ウ が従属節をそのまま構成するという現象が話し言葉的なものとして捉えられた結果、本来の「書きことば」体系で認められていたはずの、「 N 」が従属節構成形式に直接接続する」形態を意図的に記述から除くという方針を採ることになったのではないかと考えたい⁸。

これは本稿で観察した、生起位置による不均衡な対応と、資料における実態とのズレを統一的に捉えるための予測に過ぎないものの、『小文典』(1620刊)に新たに追加された以下の記述は一つの傍証となろうか。

- (26) 条件法が未来形に由来し、かつそれが未来形で構成されているといえ
ば、その用例は、日本のいくつかの地方で認められる。そうした地方で

⁷ 古代語において ム と肯否で対立するのは ジ であるが、 ジ は後に衰退し、 ウ との対立項は、 ジ ではなく、新出の マイ となる。この マイ は、 ベシ と対立する マジ を素材とするもので、 マジ が終止形・連体形の合一に伴い マジイ (<マジキ)となった後、肯否で対立する ペイ (<ベシ)と均衡を取るために、 マイ となったものである(大塚 1962)。すなわち、 マイ は肯否において ウ と対立しつつも、 ム より接続も意味も広い ベシ の機能を引き継いでおり、中世後期以降の ウ の従属節末の用法の拡張の一部には、この マイ が橋渡的に関与したものと考えられる。このことについては別稿を用意している。

⁸ 実例からの帰納に拠らず、ロドリゲスによる体系の再構が行われていると思しき事例は他にも存する。例えば譲歩法において、『大文典』はいわゆる命令形放任用法に「*Mairuni, maittani, maironi xei* (参るに、参つたに、参らうにせい)」(p.57)や「*Agunenuni xei* (上げぬにせい)」
「*Agenandani xei* (上げなんだにせい)」(p.119)を挙げるのであるが、以前稿者が命令形放任法について通時調査を行った際には、これに相当する実例を見つけ得なかった。キリシタン語学における規範性については土井(1971)、安田(1991)、白井(2013)なども参照。

は、今でも、直説法未来を、助辞「ば」とともに用いる。この「ば」は、正しくは「は」であり、これが変化したもの。たとえば「肥前」にその用例があり、つぎのようにいう。

「求めうば」「求めてあらうば」		「求めば」「求めたらば」
「見うば」「見てあらうば」		「見ば」「見たらば」
「せうば」「してあらうば」	} 左はそれぞれ右記 の意味である	「せば」「したらば」
「読まうば」「読うであらうば」		「読まば」「読うだらば」
「習はうば」「習うであらうば」		「習はば」「習うたらば」

(ロドリゲス小文典巻1 [1620刊] 84)

『大文典』の「卑語」の節においてロドリゲスは、「最もすぐれてみて発音法もそれを真似るべき」である「都」の言葉以外にも、「粗野であり有害でもあるから、それを理解し、さうして避ける為知って置かねばならない」(p.607)として「国郷談」(Cuni quiódan)の事例を列挙し、その中に「肥前」の言語的特徴を記述する。ウバは「地方における卑俗的な形式」である⁹からこそ「話しことば」の体系に記述されなかったのであるが、鑑みるに、ロドリゲスは「直説法未来を助辞「ば」とともに用いる」こと、より一般化すれば、「直説法未来」の形を「条件法」で用いることを、何らかの口語的な現象であると認識していたようである。以上は地理的な変異に対する認識であるが、「書きことば」と「話しことば」の関係性においても、これと相似的な規範意識が働いたものと考えたい。

5. まとめ

『大文典』の「話しことば」と「書きことば」の用言の形態記述において、肯定のウ・ウズ・ウズルとン・ベシ、否定のマイとマジという対立が、文末以外の生起位置では見られないことがある。一方で、体系に記述されない形態が、ロドリゲスが観察したはずの「書きことば」の資料には見出され、ロドリゲス本人が『大文典』内で例として引くことすらある。すなわち、『大文典』における体系記述は必ずしも当時の「書きことば」の実態を反映しない。ロドリゲスはそれらの形態を、単なる偶然ではなく意図的に「書きことば」の体系に組み込まなかったものと考えられ、そうした記述が行われた要因として、ロドリゲスが当該位置に

⁹ なお、蜂谷(1971)が明らかにしているように、ウバは特定地域に限定される形式ではない。

・「そちがゆかふば身共も行

(虎明本狂言集・宗論 [1642写] 40-虎明 1642_06026・蜂谷 1971: 15)

・「踊らせられうば、傘は要りませぬかと云

(天理本狂言六義・小傘 [江戸初期写] 677-9・蜂谷 1971: 16)

おけるム系助動詞の生起を「話しことば」的な現象と認識していたことを想定した。

引用資料

竹取物語・大和物語：国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス 平安時代編』（短単位データ 1.1/長単位データ 1.1, 底本は小学館『新編日本古典文学全集』）。

延慶本平家物語：北原保雄・小川栄一編（1990-1996）『延慶本平家物語』勉誠社。

高野本平家物語：岩波書店『新日本古典文学大系』, 斯道本平家物語：慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編（1970）『百二十句本 平家物語』汲古書院。

撰集抄：安田孝子ほか（1979）『撰集抄 校本篇』笠間書院。

太平記：岩波書店『日本古典文学大系』。

天草版平家物語：国立国語研究所（2018）『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅱキリシタン資料』（短単位データ 1.0/長単位データ 1.0）。

日葡辞書：土井忠生・森田武・長南実編訳（1980）『邦訳 日葡辞書』岩波書店。

どちりなきりしたん：小島幸枝編（1966）『校本どちりなきりしたん』福井国語学グループ。

ぎやどべかどる：豊島正之編（1987）『キリシタン版 ぎやどべかどる 本文・索引』清文堂出版。

コリヤード懺悔録：大塚光信編（1985）『コリヤードさんげろく私注』臨川書店。

虎明本：国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅰ狂言』（短単位データ 1.1/長単位データ 1.1, 底本は大塚光信編（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻註解上・下』清文堂出版）。

天理本：北原保雄・小林賢次（1991）『狂言六義全注』勉誠社。

参考文献

石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』岩波書店。

大塚光信（1962）「助動詞マイの成立について」『国語学』50, pp.64-71.

小田勝（1990）「中古和文における接続句の構造」『国学院雑誌』91(8), pp.38-47.

風間力三（1967）「ロドリゲス日本文典の引用した平家物語」『甲南大学文学会論集』35, pp.15-31.

岸本恵実（2018）「キリシタン版対訳辞書にみる話しことばと書きことば」高田博行・小野寺典子・青木博史（編）『歴史語用論の方法』ひつじ書房, pp.55-72.

来田隆（1993）「鎌倉時代に於ける条件句構成のムニハについて—『延慶本平家物語』を資料として—」『鎌倉時代語研究』16, pp.45-61.

北崎勇帆（2019a）「「～（よ）うと」の一群の成立と展開」『日本語文法』19(1), pp.3-19.

———（2019b）「意志・推量形式の終止・非終止用法の推移」『高知大國文』50, pp.1-17.

- 金田一春彦 (1953) 「不変化助動詞の本質 (上) (下)」『国語国文』22-2・3, pp.1-17・15-35.
- 小林賢次 (1979) 「中世の假定表現に関する一考察 —ナラバの発達をめぐって—」中田祝夫博士功績記念国語学論集刊行会 (編) 『中田祝夫博士功績記念国語学論集』勉誠社, pp.297-322.
- 近藤政美 (2008) 『天草版『平家物語』の原拠本, および語彙・語法の研究』和泉書院.
- 迫野虔徳 (2012) 「假定条件表現「ウニハ」」『方言史と日本語史』清文堂出版, pp.76-98.
- 白井純 (2013) 「キリシタン語学全般」豊島正之 (編) 『キリシタンと出版』八木書店, pp.199-223.
- 土井忠生 (1971) 『吉利支丹語学の研究 新版』三省堂.
- (1976) 「解題」『日本文典』勉誠社.
- 外山映次 (1969) 「条件句を作る「ウニハ」をめぐって」佐伯梅友博士古稀記念国語学論集刊行会 (編) 『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』表現社, pp.447-467.
- 西田絢子 (1978) 「「けれども」考—その発生から確立まで—」『東京成徳短期大学紀要』11, pp.49-60.
- 蜂谷清人 (1971) 「助動詞「う」「うず」「うずる」の語形・用法に関する一考察—狂言古本を中心に—」『国語学』86, pp.7-19.
- (1977) 「狂言古本における假定条件表現—「ならば」「たらば」とその周辺—」『成蹊国文』10, pp.1-15.
- 南不二男 (1964) 「複文」森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝 (編) 『講座現代語 6 口語文法の問題点』明治書院, pp.71-89.
- (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店.
- (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- 安田章 (1991) 「規範性への接近」『国語国文』60(1), pp.1-15.
- 湯澤幸吉郎 (1929) 『室町時代言語の研究』大岡山書店.
- 吉田永弘 (2011) 「タメニ構文の変遷—ムの時代から無標の時代へ—」青木博史 (編) 『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版, pp.89-117.

付記 本稿は第 83 回中部日本・日本語学研究会 (2019 年 7 月 27 日, 於刈谷市中央生涯学習センター) および高知大学国語国文学会第 68 回研究発表会 (2019 年 11 月 30 日) における発表の内容を加筆修正したものです。発表の席上においてご教示を賜った先生方に御礼申し上げます。なお, 本稿は JSPS 科研費 (19K23043・20K13049) による成果の一部です。

(きたざき・ゆうほ 本学講師)